ほやし草紙二のちゝ目録
平山歌
手向草
みそらづ
纏
心あふじくていひしらしきうた
手ぶきはなすじ方をなれるゝ
歌文しるを見るとは
楽山翁 附双桂舎記
[illegible]
耳我廣
著聞集 十訓抄
噴鼻 四辻
かしとしいふ詞
楽翁名士 附哥集跋
のしづかへ

[illegible]

蝦

奥山爾

大江山

霍公鳥

[illegible]

附舊作文

和須良ぬ〻

[illegible]

亮々草紙二の巻

三山歌

萬葉集一巻中大兄三山歌高山波雲根火雄男志等耳
梨木與相諍競伎神代從如此爾有良之古母
然爾有許曾虚蟬毛嬬乎相格良思吉反歌高
山與耳梨山與相之時立見爾来之伊奈美国波良
度津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清
明已曾代通記説第一の[illegible]
[illegible]
[illegible]

今あるふ山はとあるとふ山とぞこそり
ふんすハ[illegible]まや又姓こ志といふるとかは
つくてさまびをしといひてハ[illegible]詩を成さる之
かれてもふまたハ姓こ志の義まハあらで雲根火
を愛とのこと之所てせ根火と如此してかゝ山と
即和名の二男山いどめることまれバいとやとる也
さる所ハ[illegible]山[illegible]相[illegible]
いつと詩のどく男女の[illegible]あらで[illegible]
男山の諍ひて相[illegible]戰[illegible]也所てそ
出雲国所善大神諍ひを詩めんとなげして此處

まで[illegible]播磨風土記の[illegible]
ひ[illegible]さて又次の渡津海の[illegible]右一首歌
今案不似反歌也[illegible]
上とも播磨国[illegible]郡[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

耳我嶺

同一巻 天皇御製歌 三芳野之耳我嶺爾時無曾雪者
落家留間無曾雨者零計類其雪乃時無如
其雨乃間無如隈毛不落思乍叙来其山道乎
或本歌云々此御製の隈もおらじといふと代通れ
ともふみちのくまくをもとしていふことしてはな
ちにはいふの面はきくまくをもとしていふとも
[illegible]

[illegible]

○きも

手向草

同一巻 幸紀伊国時川島皇子御作歌 或云山上臣憶良作 白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右二賀年乃經去良武 一云年者經尓計武

はま松の枝にむすびたる手向のぐさ[illegible]
麻などのぬさをそへて青き白神乃か白良乃か
ぬさ[illegible]なんといへるを思ふべく候
さんも[illegible]白波の濱松がえたむけ[illegible]
なりしいひ[illegible]構へ[illegible]のまゝ白[illegible]
[illegible]濱といふべきを思ひてかくつゞけ
かへりてなき[illegible]も 巻九 重出 白那弥乃[illegible]

とやいふ[illegible]一室[illegible]
都の[illegible]幣都那美曾尓奴彼宇弖八[illegible]
段脱[illegible]也と[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]論[illegible]

[illegible]なんなど彼有間皇子の故事をおぼしめしての[illegible]
[illegible]やあらんけるまなしでハ[illegible]
[illegible]
ハ今[illegible]
やがて[illegible]
[illegible]類[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いづれも語字なるべし

著聞集　十訓抄

右今著聞集と十訓抄との二書同話を[illegible]
[illegible]
記録などにふかりて同じく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二なきしらんなげかつらしけ二首のうたをよせて
著聞集のうち古く十訓抄に見えたりけれ
これ見侍るを書かさがら聞しるすなる事あり
いさゝか詞づらじのあらぶたる所どもあり 著聞
集のことすぐれてすみゆるのこなしがたくみえうち
すぐてかれし十訓抄ハまさしくすゝめいつましき誡
しむる心ざしにて十巻の篇をわかちらかればなり
ほ土のかすなどうりあらぶるなどたぐひのや
やうびのうちわざめきて序跋の言も好もしきぬ
越えたるものや

みそうづ

古事談に九條民部卿顕頼辨官之時有公事之日早旦参陣漸及深更之間已臨飢仍於床子座喚雑色示其由召頃之雑色黒器といふものにみそうづの毛立たる一盃と署預の焼たる二筋とを持来與之云々黒器物とハひきさげめきて啜くひてむ今ぞみやこにてハいかゞかのよくみえて 授師光記大外記云床子座ハ腋陣にて如然事無憚之前云 著聞集に修理大夫のぶかゝはいつよりみそうづをたいそとけ

つくることをあれは何といふべきとしひなれば法師
なのいとなりといひなるみの脱タルカあしらへ法師子のつ稱
まてゆくそこぶとてくらせさりけれはなみ行りける
「まのつしに法しまのいとよりのほどりみそこぶやまてま
なりまるるふ散木 又田まそ行りなるはこもりがわしよあと
して行るとして行りなるほうしまのうしとしまのりみそこぶ
まふからぬまはみそこぶまてまなりまなるこう卯 はみそこぶといふ
今いふ雑炊などのあまやわの古俗國 などまて雑
炊とおみそこといつるかし はあしとえ面
又回まるぬぎこのぬりの房といふのこあるん
ちんりさてあつこんるを大うこかこぶりければ

今はこぶかしげともせしあへべしといふこ病あのは
こ粗炊をこふ用しまるよしいへばけたはいりん
それをうへしのんしんといひしの詞こまます
こおおとも紙みそこぶこみかつまりまりてゆこだ
いづこしてゆべきといへりけりこ氏のみそこぶは
紙雑炊ましてくひけりといへるなりべし 料氏のを
病あのは用こけ
としこしいけばといひてせまてねぐる
積鼻　四辻
著聞集に坊門大納言忠信卿の御おとゝ一二とゝ

ことのりて庫と通て宮門に案入れて小係
のめでたかりしすと云ふ所にやこの用ことや
がひていふされとなんかれたりけるとこ又同出
に強人たちたちなりて畠山氏の次郎とも居と
いへる大力との相撲ぬ所にも居ハ庫にあり
尻かけてゐるそれもこちてこふされきてゐるを
出たりしことあるを今俗に褌（フドシ）とかくといふ同ハ
これやこきも同書に中納言伊勢の後くしを
といふ相撲と云今もしかるに所のみに後くしまが
四ッ辻とかりてあへつらくいれたりけるもそれ

ぬぐうりにえんしてやがてうつぶしにふしまはかりこと
今犢鼻の尻ぬけよりて結れたる所をうつひといふハ
三結（ミツヒ）の首けなるべしとて結（ユヒ）目ハ上に角（ツノ）出れハ
四辻ともいふべくそれ申まるひのまふ三結（ミツヒ）とこと
いふすあれバ今こゝに四辻とかりてといへる例つ
りしげや當時の犢鼻のかたハ志らぬとおけ
さるしたる所のありしなるべし裸（ハダカ）にて相撲とする
そのむ物語にもみえたり

纏

同書に坊つ流にまはしめしつゝ荷給師と作ら

なべきるすまてめしなる何のゆゑすの所にあるゆ
しき大假字(カナ)にてゆゑすをもしらるゝこゝいまこゝ
をまきかけてゆへばまれてゆてまゐりしべしと
とあるをこの文のことばあしざまふまれたりいかふ
かやうなる狂籍の詞をばかゝをとてめしかせてせあ
られたる何まべてかまごしたるすゆゑ今ゆゑ(ゴセチ)
をまれたけてゆへば前にてゆてまゐりあふゆへ
しとこそあてこゝへとかればぞまもゆまてあこ
なり假字はかみかしとうすまとれ可笑(ヲカシ)きす
しとありこは此ゆゑ子の妻を優(ニキ)けたり小く

うこそまこゝろはて然めたる也うは男女交合する
まをまくといひたれば此次の條は同流の結也
は兵庫分則字といふとしわうきをのらが小松にて
ふけけなる花女を最ふしたるを傍坐まども
笑ひて小松まきしくといひたるなりこれも小松
とまぬのうちひすると字(アザナ)していへるし又同所の
くふくる子孫といふ所をしるとてかりなる人つゝひ
なるわしかくおのれがあひまゐるをといひたる所の
わらいのこゝへは安きほどのまゐてしに仕ゆまゐる
母にてゆりのこそ婦よりもよくこゝへ母をまゐせあへ

のしきにいへる寐字は義訓にてねぶりは眠りと
えらるゝをかゝなへて義訓にてねぶりはの真字への
ゆひなやいかゞぞとおもひて少神にやゝえ
まそりを入らるゝにてねぶりは眠りやまけくと
たゞまていひて様をのりたればねぶりとなれもあ
つひ篇の中なる義訓も紛れまけくとおほく
いひくるしありけるなるやまて多く纏寐(マキヌ)る
ことにて古事記沼河日賣哥麻多麻傳(タマデ)多麻傳(タマデ)佐斯(サシ)麻
岐(キ)云々又大雀命御哥阿比麻久良麻久などゝある書紀
萬葉等にはおほく見えたる詞なるが物は

ねまでも俗間にのこりしなり

かりごといふ詞

かりごとは借言(カリコト)の省(ハブ)けにて他物(コトモノ)を詞(コトバ)に借(カル)也世人の
案内田さへ今はつくりごとなるものゝやうに思ひなせ
げるなんとかいへ田さへ作るもれいかものたらはこと
まりれ何それなるを風のあけばとやまふ風によせ
をみし今負(オフセ)そらくそして是風を詞(コトバ)に借(カル)なりける
いづれのいふも此々くさてかゝるといひなるを
いへかうをを令(ハタラカセ)御ていひて獨言(ヒトリゴト)を獨(ヒトリ)ごと
獨(ヒトリ)ごとゝいへるに似たりかゝるけといふも借言(カコト)

隋なりあるとき洲の説にかゝつは懸託(カケツケ)ゝ言
を罵(ハブ)きし言ってみるにかゝつけごとしいふそこ
とあるにあまもしらぬ説ざるもいとしかむつきに
似たりさてみこゝろをほめ人情のそこにいふ
ハこゝべきこゝ恨をうらなどいふの直(タヾ)にも恨
ねにかゝちなせなどしまゝ心ばへなるをひとつり
やひとりしる語も

心ねなしくていひなしたる記事

萬葉集十六巻 穂積親家(イヘニ)爾有(アリ)之櫃(ヒツニ)爾鏁(ザウ)刺(サシ)蔵(ヲサメ)
而師戀(コヒノ)乃奴(ヤツコノ)之東見(ツカミ)懸(カヽリテ)而古今集 憶四貫之 いはしへ

れたらうへる心ゆふらひしきごとにぬわれをでみほ擬
まに 秋下 ゆえ 秋のつきし光えやくくもへらぬれゆつかげさへ
見てわるるれ古今に 秋月 ゆるものくちるときくべき
かゝちぐを色にしをつる秋のよれ月

手ぶはりじ そなたまつる

貫之集 ぶらくすむをんぞものゆへにそをく風ちゆゝや
あそびたるれて あのうるをるんやりるる
いひやらましはくものとのとなくゆるゆるんは
おのやりじれそなりぶるこの萬葉集四 家持 如此(カクシ)為
而哉(テヤナホヤ)猶八(ヤマカラム)將退(ナカラム)不近道之間(ヲチノアヒダヲ)辛煩(ナヅミ)參来(ミヱキテ)而又同七 寄草
如是(カクシ)為而(テヤ)也尚(ナホヤ)哉(オイナム)將老(ミユキ)三雪零(フル)大荒(オホアラキ)木野(ヌノ)之小竹(シヌナ)爾

不有九二とあるをおもふに今同じ云へるを字も
の詞れものをとゝみさへぬのてそとぞかきたるめやを
ふみて一つにむびたる一つの格として古今集よ
りこのかたは格るしとかいひ今よりてはやいふ不
詞字のみな字をてやすし二つかさなりいのべし
うるはしかるにいとかずつゝるしなのづのしるかひ
わざれそ勅をんべりきざる詩のいさかひかはしとなるも
同じさまをや格ほうれど古今集 教長卿 顕昭 後
のせきもゆるきんや格やうちのつきそげる
らんなどもありきてやすじのるび 萬葉集 三

刑部垂麿 馬莫疾 莫行 氣並而見氏毛和我歸志
賀爾安良七国とあるこれ二つの莫なりも同格な
てあるしかさて又赤染衛門集 おやうくなきうきをゆかりしりしらずなか
いかうとゆかでいとゝふかきあのなみだれつゝ乃
かずいまさかるちゑりこのみゝ夢人のいとどてあるぬ
とかいかゆるなどあるもおすじのひざまさかゆる趣
ゆかりいづれも従ってえるべきび
故文をくみて隱せる
袋草紙云 又歌有詠吾事 今殿下俊頼朝臣詠
卯花云 卯もものふきつゝくもゆる乳しゆかのかくさ

祢もこしよりまゐる位署不書シテ献之人々奇思
之處其名載歌中云云是獨歩之時、夏也とあり
今やうやうやく源順集所又庚申、和字序
のまてに今のいましへどのわの人々みよそて出たる
してなるハねばせどふしぶしなりしある意似なり

樂山翁

言戸安名人 俗称楚平 ハ伯中国八田四ツ屋氏の男にて
内國野方なる言戸氏がまゐるとなれり隠れの
後樂山と号ふ世にぬしてたくましき心ばへありて
よろづにしたしかしてたくて人のあるまゐをし

しまぬなりしなりけるから家をも興して世人
もほめこゝろまれなり壯きわざハ家のすとのこ
むのして行ふ能人などやうのこやびすぬつに
よろしかんび隠れのほとりにけるとの節ハ不絶
なりとて大きにしたしと一日ぬのれしかの
ほうものついでに言ふむ心ばへとなられしが言ハ
もしよりも名聞まゐらばあるがら書籍あまる
よのたゆまとりかてのちするわざまゐあらびこゝ心
を往ともいひ出るものにして世中のとありかゝ詩り
よろこひうれしに往ふ人の月のまへとれりかゝ

せし人々ゆゑもしきなかある人どもの深く
亡(ウセ)めるうぎりのとぶおきることのなふひろぬら
もひろ心あげてひろく人をもしきせまほしく
するまれなじめきえ此翁のとぶかゝ出るゆゑも
さてついでさいれんこの翁をそじめうこと乃心ぐへ
答へしをりの翁れ留て此ハいへちきこひろ
もおぐらめをむげまこゝ此すぐらまてあるんやと
いそれらまさハ翁りの心ふ集といふかの者り
見まへとなんいひしこハ此翁の心むきまつ得て
そうへるうりうりさてを言(コト)をしもちかて知る

日ふ此集とのを見なしきれるまゝにあのづから
ゆまはしきるまどもあれて西行乃うこまで
あるぐ中に月むの二つのへことまつゞといふす
とぐ人まゐなしぐいそれらるを餘ハちゆ集
とぐふ今くハ見られずしてかゝ世をさづしぬ
たりの家どもあるとかて家のまるびハ必しも
書おほくみるまゝらしぐしたゝほとて憚るべき
なしぐるとるんつぐしまべて此翁のあは勇猛ふ
なし題ハこの行鐘入道(頼義)出ふ道世のほれ候ま
我往生極樂之望決定可」果遂ニ勇猛強威之

心昔衣河之館をかくさんと思之時了不違と
いひて果して此念は生なりしものなりしてぬ
でらし
かみ月つゞかりなる
たゞれてハみあらしかゝる也
嵐
よもはゞる松の風さらでさへもけしかる風のるや
ゐる月
みかはさしこめハくゆしこめしまゝ
きのくじめはしかるかりなるに

ときつはもきのゝもいふもあるゞかゝめまゝはあるゞ風のうゝ
家月ぞかりも川はなりて
山でしれ庵にまゐへし私れとなりしかるも此風も
夜河雨
とちうはくりもやぎ里にてゆゞ上のゝかゝりなる
しぐれ
まれの声をかけて見えとしたゞこゞ風に追ひてゆゞ時雨
風部ぬきにかくれて待りなるの横山原恭
らふらひて「うれ毋をとゞのゞけてこゝなし人の
心のゆくやのどうかまんとかしこ可也

しつき夏の間のなきまじめの頃の菜
あるもさしおいとけて山川のなぶしの様どかはりはなさ
月と
しらくもれさまきまれ月みしらやまへはなる
志も月だけ中山なる姫井ぬしがかたを
とめらしてこゝろさ
夕づくよみ田のあるは山松のけれゆかがこびしなる
男春若わづ像をかしとてこれまゐりて
かけといひしなれば
今さしふがごろくべくはあらねどもやひしかもたまるふ

人しき病まこかりてのおちれ年五月十日ごろ
もけちまゐりでし
あらせてあらじとしかみちは庵まれまとのなるに
遊め
うれめは光はまきてこゆれどもれ夕の中にまゐるに
三月二日の夕縞浪のむこまゆきて
せのいとまかくれて鶴はきつれどもむはふこゑかしかし
四月のこゝろもけちまて
谷底にたゝれ中のあらすん松のこれは初りさつ
三日月五日拙尚先生の墓まゐりでし

石のうへにぬるづきとかれば　わがつゞへ宮わちゆ風雨に
枝ゆきまほしきおもひしどもあつまて　山ゆゑ乃
かしめまりてあのまとやくゆるる双極令記あり
ぬしが人ぞ爲ゑつべきかたはしまりてつゞけ
こゝまゐしつ
人なれば人さまざまに人こゝろ　ゆゑにけびくさふひと
ごろ　ゐといつゝおのハ　ふ山のゆきれこの双極令
ましてなのませるとなりいぞやあるれ　雪タまて
みどの仗罵ノ　ことん芋くしの　雨ヒシリ　ハしらぬ
なまくの隠れ　ぞちうりべきをせるふれなり

とみゆるもそてくハ山ぞられわらひぬとなりて
丘ヨカ谷のおもてとかまるさぐひゆほかしこれ
翁やまやくより世のことハ今のあるまゆづひ
ゐれどとにしまうれ　ゐるみてぬ山ゐるをもほかぐ
やがて家のあるりをきてしもやとふ示
としておわるれ　ゐ山のぬくれみるものゆまれ
まつくてあるとなん　又まかくハ古法帖とう
でゝまかまさふるをなんぬまれるかれど
わらうまし姓どあるまで世中のげんまし
てくあるをもおしれ人をもまくれるなどり

さてぶんたもちひれはなのかぐてきるあり何ハ此の
ぞうらかぐんうしつゝあどひるどもあるとも
なくあきらめしかへるおりしかれ七ちる
のまゝ話をあるをしへるんぶのこら
ぶせられるゝ三つなつむ所なき心ぶ事れ
ぶうへまちうどぬあるくせきへかりられば
もておぐるへ人ぶけもちあるしごゝ
なんぶまちうどかれて客（ニラウド）心ちれつゝあると
いつものほくれるれハこの世なぶらけ世
界なるぬ月のうつれ風ともしべくとて

こハ蒙いませしのるんなまてもこゝ乃詞
うきてくしあつしへられしとうけぶひながら
俗のしぶき心まるあるひるしつゝほどゆくり
なくうせのひのまちうくいのハまゝびかき
わるゝハ行りれさるハいぶいんかのなき
路く紙かけるんしうしへのうあしまてそ
なるハめとてこゝひこゝ乃やとしひのほどに
あまとり行りぬ
とぶこゝハ文化十四年まておきれのあまりかれ
三年の秋まなん

櫟翁居士

櫟翁者ハ小林氏にして名ハ方（作係　揖吉）とぞいひし
わが故郷備中ちかきわたりの人なりせしが家ゆたか
なりけるまゝそのかたげ心ありてひろく子らをもとれ
おしへせ人のまじらひのうへなどもこゝろおはせしふ
のびぬきところありて今世にはけぢめをとなかりき
わかうよりかゞりも書をよむことを好みてや和漢
こゝろざしもあつく漢学ハ西山拙斎先生の門人
和歌ハそのはじめ香雪軒澄月吐屑庵慈延二上人
にうけて学びけるを解大かたの枝葉をあつくも

いとゆたかに中々囲炉裏かゞりならずれてうん
上手なりし桂なみべきありよもやくこれらにあ
の流（シリヘ）ぞうけつぎしとなん

都まゐらせびかゝうしのゝづき朝ちまかる
いろりもかくて桜ぞそれうちかくれまめの跡

寒夜月

あかるなて心をゆく桜のなかに月まえとするぞかし

旅泊

舟人のいづるとまへど[illegible]

[illegible]

跋

あらもなきこれ世のさまぐこゝかしかる
これも文化十四年の夏のなりなり

錄代云

たゞかきまもとしとせけしかしはほまでも
忘れぬりのやわづ夏大瓢法師ことせつくは
おもひてなきたへ御りのがりなるこゝろまのれも
却へとて出よりのがりきたるにこの旅の間れ
はなくはしでしこのやあるやざれたるやかき
くづしかたりしたるやまた太宰府までのざれたる
間違ありとしあまるまゝ却よりへつて心あふるゝ

といつをまのまゝ御してあるめでこいましへ乃
西行は其の玉れ屋とても心をみて崇徳帝れ
御怒を宥(ナダ)めいまの大瓢は却て心あふるなりと
いひて菅丞相の御霊(タマ)を和(ナゴ)むといひたれば此褒言(ホメゴト)
こゝろいとこゝろとれいかでそれ御まきてこべ論乃
ふくろまゐしてわう生(イキ)のうぎかりてめぐらひ給ふん
といひしこそいとゝしかるしの

あしがれへ

これもまかじ度などもやまたんふまて一日青
木左衛尉のりとをこゝろひてあとけてあらはる

山ゑのきんどもおもふこゝろ
などいひながらわどもは
出れりきにはうへありけれ
ことありてあきの二ゑめくまでなりしこゝろのみの
うしとやおもはゝ
岡のみちを心にかけてあるかふ
さまりるつきのかぶとなるそ
つくしへくぶかくなりしこゝろみ
夕まぐれさかしろれバあいれ
きまをなるみぎぶりなり
はゝなりしみなりなり
とぶらはしし

霍公鳥

ほとゝぎすはしこゝ
みくのほん
あぜん寺一とせ
の岡碧巖集
ほんきこゝろの年
わかりれなりわ
十あしげりの
なりなりもわ
尾のこゑ

ほとゝぎすはやまのみむろ こゑのの
みくのほん ふるさとは見され
あぜん寺 一とせ福ゐの伊勢の人と二夜
の岡碧巖集 まれしとまでこゝろかいこう
ほんきこゝろの年 ヒルヨ あれがやもすれば
わかりれなりわ まさしもいとをまほしけれ
十あしげりの いとゝ
なりなりもわ ぶりまち眠たきく
尾のこゑ あはさ はいとまれしなり
ゝ見じまれ粽浦なりけ

いのちまてがきこしらあるをしまゝてハせとを
ハとせどがほどくこゝ一さびん

蝦

かたづハ大井川いとしとのころかなぐの付
ゑもとぞしきゆのべ後月橋の人まてきたる
りも川まハよのつゆなるめをゆつものなぐ雨あり
つゞきたるタづれゑよりも思ひきへうたはそ
大そしのかとより川まりけてのがりゆくみれて
こゝろしとゆつきたりしハそるになぐしまつる
まやあらんとやふまあんせてうれ山川のいそかを
ちらびきたらいづ

ちゝのいのちのうれといふぬるおもふんさあれたる

ひみ

ほどうりまきかへるせみのあるハよふかしまし
ふしらいてまくてくらしてまくきりのうちも
いまつづしロぐしハこゝぐのものまや望ちより
まハさしくきこゝぐこゝぐ雨れさゝりまぐしき
みうげなどおのれまかくこくきありくれや
とらけしと山ぎとくまきけばこゝ
又ちむしとなくせみのもあるゆゑのまゝ
そしほどきこしや俗れ[illegible]のうつくしと

[illegible]

奥山爾

[illegible]

[illegible]

萬葉の此[illegible]つけ[illegible]詩秋山寂々葉零々

麋鹿鳴音致處ニ聆ニ勝地尋来テ遊宴處無レ朋

無」酒意猶冷とあまとして此第三句勝地
尋来といつまたは人の踏かるまやそといはれ
るより古今を聽などいふべるを一方より説出る
まつきて人ぞあるまてこまくしけ説とちぎる
人はやどて菅家はこのをあしくきとりおくる
やまといつるへひかるまし此作のをもつらびて
こは秋山寂々葉零々麋鹿鳴音数處聆と
ある二句の中に説ともみち踏まゝ鳴しあと
いふ詩をはぬがるまいひ終まる也勝地尋来
をくはしばしくきく人の所をとまりけ出ていふ

ちこまて此詩踏かるといふをあはれるまはしかぎる也
凡このそのことまりは詩の二句はいひつくべき
ぶかわかれば詩の二句は此を題まつきて云れ
うへまは見るめるすどもをいふぶかりき今を一つ
ふまつをいはん夏のかれかまたまれば詩はれ
なく一あるまあるまのめといふるは日長夜短
懶晨興夏漏遲明聽郭公嘯取詞人偸走筆
文章氣味與春同まこ気はかるも風のすじく
なりめるは枯るつはしはうべいひくりといふり
涼風急扇物先衰應是為秋氣早来壁蛬

家々音始亂叢芽處々萼初開などのこぐひ
いづれもほの二月ハ三月の間をかけてぞ
菅家此歌をなすあやまりのへるはあぞこの情
作のことをきく人のひがこゝろ間なるを人を
難つけまことをかしこく心づきかしを
和漢らめて
同右近同ましてあとがたまひてしまひて人の今れ
をしくもあり此拾遺抄云師説古人女の二まを
うへどもつゆなどのしるはいつげりかなし
うるべきを我身ともちなびして我を人の想れ

四討をうなて今はもうせんるを惜める心哀ふきまし
此言ゆまとふおれをことゝいふるを三世流なく
行れしるしをこゝあるを古歌初学云かゝ所ハ
てのさうてをうちてのかゝぶるあるをわが恨を
おきて人をかしむるをしてめづる人あれどもとも
おぼしれどこゝろ心ようまやえづが揚ゆるんを
よみしなどを歌のゆゑとも以べし古のこゝろ此
歌をいふいつ心はよくまれあしくまきちふ心の
まふのべしまをこそいへ此左をのこゝろはかゝる此
おひめぐして紛るをなしうるのとしへあきて

さゝゆ[illegible]を同じ心きゝに
わかるをとてゝえずかなしきとしもいかがあらん
けごろもやくつよしへとことまなりと言のこゝ
ことめくせとなりしゆゑといふなり今考ふ
ゑ御ちのうるれまとそゝ御を從まるハ志ぞ
らくかしけ心の情を解しはしまじるハ
ちぬと同じこハ中が身の悲をかきてゐるぞ
人の命をなげきゝる事なりあらば彼心なり
ゝる人をかくゝゆかりて御ぐりれ物をわかれ
るをおぼつかしめやらしめゝる恨うてこやぞて

元輔の物ゝきれうるみを神をしかまつて末の和
山はなしじとハとなるふ下のこゝろ同じ御ぐ中ふ
ゑゝきれのうるハ人をきしむけてゐるはなまてぞふ
ふふしかハおのまゝ獨ありなどきゝるはまふいひ
なしゝるなり詞ゝまどへるこゝちとも集 春下 貫之あひしき
まゝる人のまゝできてかへりけるのちまゝのてをる
はしてつゝはしゝる同じあへしえもやくると様を
ゝのハまちるんてちゝばらしかんといふぞ如き言の詞
いをしむしひておなどきゝるゝしまして下のこゝ
を行をおとゝのあしめ催せることを今ゝ同じ

かくるゝ所ハ語もあらはれてうたがふべきならし
上のごとくしきに論ひたれハ畢竟語そのやうにて
それ様とはいはれたるなりおくまでいふべく今の
けうに於きて案ずるにハ語源なれど大和物語
さハ男の方なれど一方ならぬを付てちうひとれど
のりくるのちよまてゆゑ余りなり亂ぬめの
なくひたまへつきて詞と依るをあらぬ申まて
伊勢物語の芥川武蔵野の際大和物語これ
おほえすてんの頃などのとくいと面白くあやし
ある一條ありみけるにありあまて詮なしの家

つきて宗ハ何るかの由なきにとおもひてつゝむ由
るさやはす詞とせるありみえきくこと侍へ
ふるまひやさかりなるもあるて一定ならざるが
中小今なほんほの二ツが中まてとて又他
まる詞の縁なる後撰サなんおのつから悪撰也
方(カタ)人(ド)となるべし

大江山

同小式部内侍大江山いくのゝみちのとほければ
まだふみもみずあまのはしだて　金葉集 雑上 詞書
離別 和泉式部保昌が丹後なるにありて

をるふ和るのしまだ人をひかづらふときそつかしける
中納言宮和風さゆりびきるまほしきといづるふふ
ぬらけぐしもしんあしのうしゆとあるとこれば武郎と
宮和つとんことふ和しきなどの間なりたんゆるる
子の内侍ともあるまいどみてもふれなどせられたる
よりこの詞書のどくハあけるなるべしこれ絶て
用なれるなれどこゝよしあるるの詞ゆまみて
ねばぬしおなるゆけて此面などもあれ嘗れ
るどくつえて出ことらぬんこゝろと和名のこの
伊勢大輔の家の所ゆ云上の小町アのうたも此ゆ

どりあへぬるそれはよくわりされど口さ和るのかし
らげたるハつえのうきさ云のてふ和ゆまハあらびこと
あるハひがあるを論んを問そるふあるりていると
云のなれば何のさ国のどやうなるんまいことぞもなの
づからゆさなくるのさ国せまれたんまい云のも云
がしていそがしうるなしすべて和やかなも大らの
も和くも荒く母いたるゆ彼まのて此れ
あらびこれがてを池のおのおのなる心とぞなり
ける今母後へ人つかしたんや仕ハまうぞこずや
などなしうさるされたる何まあるりてかるハ云の

ハ仲麻呂表撰筆さてハ白人信之兼盛君見の
この[illegible]ハ対[illegible]を考撰ばしるまでもなく世を
いとゆゑしるくそ人のうとしいへバ先少なく
出るものにして志しもよきこのなればやがてとらせ
しるゝ也そ解け心のゆゑしるなれば上ハ小町
伊勢みちく躬恒君ありやうぐりて基俊俊頼
当門まてハ俊成西行慈圓謙倉右大臣にて
ハ自られ四面ハど皆名人まていづまもく秀
逸みきぶ中よりこれとぬきしられる一首
一そのまゝまてがり此のものなれも論じ給ひむ○と

ことのみ心ぞへハみゆめるされバいふぞや
おぼゆかし入まりとあるハ吉河の心まして此の
まおきてハ十分の精選也よしとみる撰ばれ
るにまきそ人れおとて一そづとりしんな
いかゞすぐつまハおすべき必ずもめでしと
ゆゑしきんを出べきことなり誠よとりても
此の面しこハ古来此月をのゝを万代[illegible]
など解りこちらしくこなる人来はるまぐの論ひ
どもをまくめるなり何の言ふされる人なり
古ぞくち

けらじ今おもへ一番にてはからひとはげて
芋もあらはんとあらはんとおもふくひは
そじめともいはひかべし先にしくれはしまひ
ひそ口ふとあそれとおぼさんまいぞ二つれ
あしきわざやめおひく人なきくのせれわるひ
ともいまいまそ御しまはいぞ男とぐりもあるれ
らんなどかしくいさめたれば男とぐりぬもぞ
あきれぬるなるなるをおしのどひてわやう
わぬしはいつひなきて男すれいさくまきれをれし
うふわぬしなるばこうなるの今いまで

けらんさりかうつ又かぐりまづしきゆりそこ
ばくの御こくいへるこう見るあやしきもたぼ
ゆきとていとゆゆぬがるれは女げゝうぶひ人
るもことなりまうしあしばまことといひきせ
うせんこは必かくまうめるる急（キウ）のすゑんずん
とかひそもこうけりしうばりまこびあまこうび
のゝ給へる御手れおあしと二文三文づゝ
うくしおきけりしが月ごろまつりて今ゆゆ
しろとなりけりぬといふは男そじめてそこぐうい
どくてあづの佛まれをさへ人ありぬへかりとて見